



# 酪農試験場だより

No. 37



放牧風景

## 内容紹介

- 1 放牧の季節が近づきました!!
- 2 エサ作りの季節となりました
- 3 受精卵移植の連載について (予告)

酪農の生産性向上には

—— よい牛・よいえさ・よい給与 ——

# 放牧の季節が近づきました!!



酪農家のみなさん、放牧（山上げ）の季節になりました。入牧の準備は整いましたか？放牧育成効果をより一層高めるためには、入牧前の管理（放牧馴致等）が非常に重要です。

育成牛を放牧する場合、放牧環境（気候、飼料、社会、衛生環境）にスムーズに適応し、放牧初期の発育停滞、疾病による損耗を未然に防止するためには、放牧馴致は十分に行う必要があります。特に舎飼いされていた牛は、十分な期間をかけて行うことが大切です。

すなわち、放牧予定牛は早期から屋外に出し、入牧2週間前から昼夜パドック等に放し飼いし、気候の変化に慣らすとともに群としての行動を身につけさせます。また、早くから青草を給与し、第1胃の馴致を行い、入牧2週間前には青草のみの飼養に切替えます（図1）。放牧馴致期間は少なくとも1ヵ月間は必要です。

育成牛の放牧は6ヵ月齢以上から可能ですが、この時期までに粗飼料主体となるような飼養管理をし、ルーメンの機能を上げましょう。

角のある牛は、人間や他の牛に対して危険ですので、除角するようにしましょう。削蹄についても、放牧時は運動量が多いので蹄が削れる危険性があります。特に舎飼いされていた牛は、蹄が伸びていますので削蹄を行きましょう。また入牧前には、発育状態をチェックして放牧する牛を決め、さらに衛生検査を実施し、疾病等があれば完全に治療してから放牧しましょう。

育成牛の公共牧場への放牧は、子牛を集团的、効率的に飼育するうえで最も望ましい飼養形態ですので、以上述べた入牧前の管理を十分に行い、山上げするよう心掛けてください。

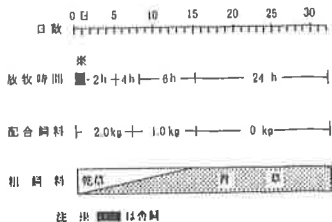


図1 放牧馴致方法

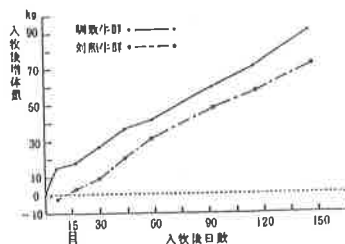
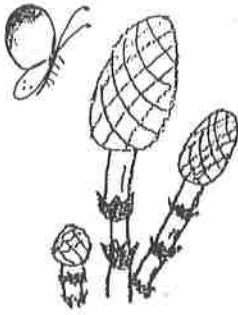


図2 放牧馴致の効果

## エサ作りの季節となりました



日本は、サイレージの国であると言われている。それは、酪農のさかんな北アメリカ・西ヨーロッパと比べて、気候が湿潤なために乾草よりサイレージの調製に適しているからです。日本において乾草生産のさかんな地方は北海道ですが、最近はその

北海道でさえも、乾草が減ってサイレージが増加しています。それは、北海道においても、なかなか良質の乾草が作れないという事情からだそうです。

我が栃木県においても、当然のことながらサイレージが自給飼料の主力になっていきます。トウモロコシ・ソルガムの夏作とイタリアン・麦の冬作による通年サイレージがその基本です。しかし、これらの作物に対する農家の栽培技術・調製技術には、思いのほか大きな違いがあるのです。下表に、府県における単収分布の表を載せましたが、農家間に大きな収量差のあることがわかんと思います。例えば、トウモロコシ(畑)の場合、収量6t以上の農家が30%であるのに対し、4t以下の農家は28%もあるのです。これは、播種時期や除草剤散布時期の遅れ、不適當な施肥、そして、収穫時期が早過ぎたり、遅過ぎたりといった基本的な技術の違いが、このような収量差をもたらしたものだと思います。「基本的技術を大切にすゝこれを、今年のエサ作りを始める前に、肝に銘じて頂きたいと思います。経営良好な酪農家のみなさんは基本的技術を確実に実行しています。

### トウモロコシの県奨励品種

極早生 NS105、P3732

早生 XL61、P3352

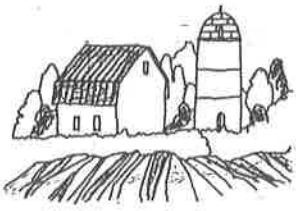
NS68

中晩生 P3160

表 水田転作と普通畑での単収分布 (府県)

草種	区分	2t未満	2~4t	4~6t	6~8t	8t以上	平均収量
青刈りトウモロコシ	水田	9%	25%	41%	20%	5%	4.7t
モロコシ	畑	7	21	42	24	6	5.1
イタリアン	水田	14	29	32	16	9	4.5
ライグラス	畑	9	24	33	21	13	5.1
偶々	水田	26	38	26	7	3	3.5
き牧草	畑	13	37	33	13	4	4.2
平均		13	29	35	17	7	4.5

## 受精卵移植の連載について(予告)



これまでも、受精卵移植(E・T)については、酪試だよりに何回か書いてきましたが、これらはE・Tによる成果の紹介が主でした。今年の1月からは県酪連のE・T車も稼働を開始したので、野外でのE・Tの普及もスピードアップすると思われます。しかし、初めてE・Tをやろうとする場合には不安や心配はつきものです。そこで、具体的に採卵から移植まで行うときにどのようなことに注意してやれば良いかということを中心に5回シリーズで連載したいと思います。

実際に何個ぐらいの受精卵が取れるのか、そしてその受精卵を移植してどのぐらいの受胎率が得られるのか、特に気になるところだと思います。まず1回目は平成元年度のE・T成績について紹介したいと思います。2回目は良い受精卵をたくさん取るためにはどの様な牛を選んだら良いかということについて、3回目はその受精卵を移植して高い受胎率を得るためにはどの様な受卵牛を選んだら良いかということを書きたいと思います。4回目はちょっと専門的になりますが、人工授精の時と違い、移植の時に注意しなければならぬことがありますから、そのことについて書き、最終回はE・Tによりせっかく受胎したのに、分娩の時に死亡したり、哺乳中に下痢をしたりして死んでしまったりはそれまでの苦労が何にもなりませんから、これらの事故防止について書きたいと思いますので、これからの受精卵移植の連載にご期待ください。

### 受精卵移植の連載の内容

- 1 平成元年度のE・T成績について
- 2 供卵牛の選定について
- 3 受卵牛の選定について
- 4 移植時の注意点について
- 5 E・T産子の分娩時及び哺乳中の事故防止について

酪農試験場だより No. 37

平成2年3月13日

栃木県酪農試験場

〒329-27 那須野町林松 298

電話 0287-36-0230